

心に必要な大切なもの

苫小牧市立青翔中学校 安田朱里 2年

「人間ってアサハカよね。ヒーローメン的な情報でしか物を見れないっていうか。」

これは、私が好きな漫画、スパイファミリーの中で、同級生から悪口を言われたアーニャに友達がかけた言葉だ。アーニャはスッと心が軽くなり、悪口を気にしなくなる。私は心がホワッと温まるこの場面が大好きだ。

私も友達の言葉に助けられたことがある。なぜか私は知らない人から悪く言われる時があり、気にしないふりをしていたけど、耐えきれなくて友達に相談した。すると「よく知らない人のことを悪く言う人、好きなの？嫌いだよね？嫌いな人から嫌われるなんて、むしろラッキーじゃない？」と私が考えもしなかった言葉が返ってきた。そしてアーニャと同じでフワッと心が軽くなった。なぜ友達の言葉はスッと心に入るのだろう。たぶん親や先生に全く同じ言葉を言われても、ここまでは響かない。胸に何かがかえて通らない感覚だ。きっと友達は、学校の「空気感」を知っているからだと思う。先生の声、チョークの音、ささやき声、そして視線。全てが混じり合うそこにしかない、そこに居ないとわからない「空気感」を知る友達の言葉は説得力が桁違いだ。そして相談する友達のほとんどが「私も色々あったんだよね・・・」と言う。私だけじゃなかった。みんな色々あるんだ。

私は、傷つかないように強くなるべきだと思っていた。でも、多かれ少なかれみんな傷ついている。気にしないのは無理だ。傷つかない方法を探すより、傷ついた時にどうするかを決めておくことが大切ではないだろうか。勇気を出して相談したら、身近な友達が一瞬で解決してくれるかもしれない。無理だったら、その隣の友達が何か教えてくれるかもしれない。ダメなら他のクラスの友達が・・・。そうやって救いを求め続けられるのも、学校だ。私も、大切な友達の心を救える人になりたい。

でも、誰にも言えないほど追い詰められたらどうしよう。テレビでは、知らない人から誹謗中傷されたことによる悲しい出来事が報道されている。心の救世主になる何かがあれば避けられたかもしれない。私にとってそれは、スパイファミリーだ。落ちこんだ日は必ず読む。すると思わずクスッと笑ってしまう。その瞬間、押し潰された心にちょっとだけ隙間が出来て、ほんの少しだけ楽になる。この習慣は、きっとこれからも私を救ってくれる。これからも私には色々あるだろう。でも大丈夫。私には信頼できる友達とアーニャがいる。

星の城、明日に輝け

北海道教育大学附属函館中学校 太田陽 3年

「ズダダダ、バーン。」

新政府軍の銃撃によって、膝から崩れ落ちる土方歳三。

『副長ー!!』

元新選組隊士の叫びが胸を締め付ける。

一九八八年に第一回公演が行われて以降、市民ボランティアによって受け継がれてきた「市民創作『函館野外劇』」縄文時代から始まり、今の函館に繋がるまでの物語。劇中のフックパフォーマンスやよさこいでは、観客も手拍子で参加し、一体感が生まれる。

函館に引っ越して来てから、五年目にして初めて観劇した去年の夏。

「素人のボランティア劇だから、大したことないかもしれないけど、せっかくだから一度は見てみようよ」と母に誘われ、軽い気持ちで五稜郭公園内の特設ステージの席に着いた。時代を追っていくなか迎えた箱館戦争。剣を交える乾いた音、地を蹴って上がる砂煙、火薬の匂い、響く大砲の音。真剣な眼差しで対峙する旧幕府軍と新政府軍。その空気に圧倒される。

「ズダダダ、バーン。」

『副長ー!!』

この叫びに、私の心も射抜かれた。

「なにこれ！すごく面白いんだけど！」

今まで見てこなかったことを激しく後悔した。

今年、第三十五回公演の全日程六日間のうち四日間足を運んで、配役の違いやたまに起こるアクシデントを楽しませてもらった。

「函館野外劇ってすごいね！」って友達に言うと、「あ〜、知ってるけど行ったことない」と返ってくる。聞けば、地元でも見たことがない人が多いらしい。栃木から引っ越してきた私は、以前の土地ほど函館に愛着がなかったが、「函館野外劇」に出会って知った、高田屋嘉兵衛やペリー提督が惚れた港。武田斐三郎が築き、土方歳三が守った星の城・五稜郭。函館大火を乗り越えて、築かれた街並み。知れば知るほど、この函館の街を好きになった。

「函館野外劇」が推しになったことで、「栃木に帰りたい」から「函館に住んでいたい」になると同時に、演じる一員になりたいと強く思った。緊張で震える手で電話をかける。

「殺陣チームの練習に参加させてください」。この一歩から、新しい推し活動が始まる。あの舞台でいつか私も叫ぶ。

「副長ー！」

嬉し恥ずかしシュークリーム

旭川市立緑が丘中学校 西野目実亜 2年

外の皮は香ばしく、中のクリームは濃厚で絶妙な甘さ。互いに調和し、引き立てあっている。そして、キャベツのようなかわいらしいフォルム。そう、シュークリームだ。私が一番好きなスイーツだ。

今までいろいろなお店のシュークリームを食べてきた。クッキー生地のもの。中のカスタードがこぼれそうなほど柔らかいもの。注文してからクリームを入れてくれるもの。様々なものがあり、どれもおいしい。特に私が気に入っているのは家に帰るときによく通りかかるお店のものだ。

そのお店のものはシュー生地もクリームもしっかりしていて、かじってもつぶれずにカスタードとホイップの層が綺麗に現れる。クリームがたっぷりに入っているが、あっさりしていてしつこくなく、いくらでも食べられるような気がする。普通サイズからとても大きなものなど様々な種類のシュークリームを売っていて、一番大きなものは直径約十五センチメートルもある。食いしん坊な私は勿論いつも一番大きいサイズのものを食べる。

以前、父がそれぞれサイズの違う三つのシュークリームを買ってきてくれたことがある。母は私にどれがいいか尋ねた。普段なら迷わず一番大きいものを選ぶのだが、ちょうど叱られた後だったので申し訳なさを感じていて、「一番大きいのは、ママが食べていいよ」と答えた。きっと母は「いいよ。実亜が食べなよ」と譲ってくれるだろうと予想していたのだが、意外にも「イエーイ」と言って満面の笑みを浮かべて、自分の皿にのせてしまった。本当は私は物凄くその一番大きなシュークリームを食べたかったのだ。気がつけば目から大粒の涙が溢れ出し、抑えていたのだが「一番大きいのが食べたかった」と本音もれてしまった。母は笑ってそれを私にくれた。後から聞いた話なのだが、母は私に少し意地悪をしたかっただけらしく、どちらにせよ私に譲るつもりだったそうだ。

それからシュークリームを食べるときには毎回この話が出る。家族全員大好きなエピソードだ。楽しそうに話す父や母を見ていると私も嬉しいようなくすぐったいような気分になり、家族に愛されていることを実感する。この大きなシュークリームは私たち家族を笑顔にさせる特別なスイーツだ。このシュークリームと家族がいればたいの事は乗り越えていける気がする。そんな力を私にくれるこのシュークリームをずっと推し続けたい。

マイ トロンボーン ジャイアント

北海道教育大学附属札幌中学校 辻谷寛大 2年

私の祖父がジャズ好きで、トロンボーンの演奏を趣味としていた影響で、私も楽器に興味を持ち、祖父と同じトロンボーンを小学四年生から習い始めた。祖父の勧めで「ジャズの巨匠」達の名盤をひたすら聴いて完全にジャズに惹きつけられてしまった。サクソプレイヤーのジョン・コルトレーンの『ブルトレイン』という曲を初めて聴いた時、トロンボーンプレイヤーのカーティス・フラーのソロに心を奪われた。コルトレーンの激しいソロに続き、負けじとぶっ飛ばすトランペットのモーガンの次に入ってくるフラーは、単純なフレーズに熱いグルーブを効かせた演奏で2コーラス、3コーラス目からは速吹きに参加。それは当時の私にとって、とても衝撃を受けたフレーズの数々だった。

すっかりフラーの虜になった私はフラーの参加するアルバムを聴きまくった。彼の味のある、切なさの中にもどこか温かみのあるような、心に共鳴する音色を耳にすると、まるで最高級の毛布にくるまれたような幸せな感覚になる。モダンジャズを代表する世界的なジャズトロンボーンプレイヤーであるカーティス・フラー。彼こそが私の「推し」である。

私は札幌の二つのビッグバンドに所属し、憧れの彼の演奏に少しでも近づけるよう、日々トロンボーンの練習に打ち込んでいるところだ。

二〇二一年五月、彼が亡くなった。フラーの生演奏は聴いたことがなかったし、もうそれが絶対に叶わないことはとても悲しく、寂しい。だが、彼が素晴らしい沢山の作品を残してくれたことに感謝し、これからも彼のような音を目指して練習を続けることが私の推し活だ。

彼の音楽はこの世に生きていくのだ。何度でも聴くことができ、新しい発見ができる。彼の曲を演奏したり、バンドの仲間やトロンボーンの先生や祖父と、彼のことを語り継ぐのも楽しい。

ファンキーでアーシーで情熱的でロマンチックで、私を興奮させ、優しさで包みこんでくれるあなたが、いつまでも私の推し。私にジャズと出会わせてくれた祖父にも感謝だが、あなたが、こんなにも私をジャズとトロンボーンにのめり込ませてくれて、私の人生に彩りを与えてくれたことは間違いない。ありがとう、カーティス・フラー。いつかそちらで一緒にセッションをしてもらえないだろうか。

私のお気に入り

小樽市立西陵中学校 増村つむぎ 2年

小さい頃、私は歌わない子だった。母が心配するくらいに。そんな私が初めてハマった曲は、三歳の時に観た劇団四季のライオンキングのミュージックナンバーだ。それが私の推し、劇団四季との出会いである。私は、毎日ヤングシンバの真似をし、歌って踊った。歌うことが楽しくて楽しくて。

だが、三歳の時の経験が劇団四季を推す最大の理由ではない。私には、それ以上に想いが深まった出来事がある。自分自身が劇団四季の舞台に立ったことだ。

この経験は、私の人生を大きく変えた。子役担当の方に言われた「殻を破れ」「必死に」「毎回、新鮮な気持ちで」という言葉。特に「殻を破れ」。この言葉は、今の私を作り上げている。以前は、恥ずかしくて、思いっきり笑うこともできないし、自分の意見を言うこともできなかった。けれど、今では、男子の前でも大きな口を開けて笑えるし、嫌なことは嫌だとはっきり言えるようになった。

私の生き方に影響を与えてくれた劇団四季のオーディションを受けようと思ったきっかけは、ある人との出会いだ。元劇団四季の俳優で、現在はお寺の住職をしながら、地域の子どもたちに本物のミュージカルに触れる機会を与えてくれる岩本さんだ。岩本さん以外にも、劇団四季を辞めた後、子どもたちに歌やダンスを教えている人がたくさんいる。また、劇団四季では、全国の小学生を無料で招待する、こころの劇場という活動を行っている。生命の大切さ、人を思いやる心などを舞台を通して語りかけ、感動を届ける取り組みだ。劇団四季の方々には、演技や歌が上手なだけではない。人としても素晴らしいのだ。

私が劇団四季を推す理由は他にもたくさんある。圧巻の歌声、思わず口ずさんでしまう名曲の数々、目を奪われるダンス、いくつもの役を演じるアンサンブル、そして、母音法などの練習を欠かさず行っているからこそ成り立つ、声の聞きやすさだ。セリフや歌が、はっきりと聞こえるので、物語に引き込まれていく。さらに、セリフがない時でさえも、俳優の表情や間から心の声が聞こえてくる。この心の声があるからこそ、想いが胸に深くささってくるのだ。

今年の夏、東京に行き、貯めていたお小遣いで劇団四季の舞台をいくつか観てきた。すごく幸せな時間だった。観終わった瞬間に、もう一度観たい、何度でも観たいと思うくらい、私は劇団四季に夢中なのだ。

私を綴る

釧路市立美原中学校 佐々木碧 2年

音楽には、命を綴る力がある。閉じ込められた私を音楽は救ってくれた。

小さい頃の記憶はもう残っていないが、物心が付いた時には、誰かの顔色をうかがって生活していた。褒められると嬉しくて、怒られると悲しかったから。私が少しがまんして言われた通りにすれば、大人はみんな褒めてくれた。幼い時はそれで良かった。けれど、人は成長してしまう。年齢に比例して、求められる物も大きくなった。それでも私は私でいなければならなかった。誰かの期待に応えることでしか、自分の存在意義を感じられなかったから。次第に、理想と現実にはギャップがうまれた。ふくれ上がる矛盾と重なる嘘が本当の私を押し殺していく。

そんな時、私はソングライティングに出会った。ピアノを習っている私にとって、それは最高の趣味になった。誰に聴かせるでもないけれど、押し殺したと思っていた本当の私が言葉と旋律が産む物語となって昇華していった。おかげで私の日常は色を取り戻した。何気ない日々の欠片は、私だけの音となり、それらの紡ぐ歌は私だけの世界になった。誰も知らない私だけの世界。そこでなら私は、本当の私でいられる。私は私をほんの少しだけ好きになれる。

それから数年がたった今も、曲を作り続けている。いつかそれを仕事にできれば良いなという夢を思い描くようにもなった。きっと世の中のほとんどの人は、どこか自分を偽っているのではないだろうか。他人と足並みをそろえることは確かに大切だ。人は一人では生きていけないのだから。しかし、時にそれが足枷になってしまうこともある。だから私はその足枷を取り払ってあげられる人になりたい。私の綴った言葉で、旋律で、誰かがほんの少し前を向けるような、そんな音楽を作りたい。何者でもなかった私に色を与えてくれた音楽で、今度は私が誰かの日常に彩りを与えられるように。

私は音楽が大好きだ。本当の自分をさらけ出すことのできる唯一の場所だから。ここでなら私は私を愛することができるから。いまだに誰かの顔色をうかがってしまう自分自身を受け入れることができるから。この命が消えるまで私は音楽を止められない。だから私は、音と言葉で私を綴る。